

---

# ダラダラ春休み。

国後旺

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ダラダラ春休み。

### 【Nコード】

N4976G

### 【作者名】

国後旺

### 【あらすじ】

春休みにダラダラする話です。

前作、ダラダラみかんの続

編（ジャンル：ケータイ用コメディ）ケータイ読者に向け、イラストあり。

お兄ちゃん、みかんを裏切る。(前書き)

R - 12です。

お兄ちゃん、みかんを裏切る。

兄と妹

3月26日。今日から妹が春休みだ。

今回は休み期間が短いので、春休みまるまる仕事放棄することにした。きゃほーい。

午後12時。

俺は昼食に、ラーメンを作っていた。真っ白スープのヤツだ。小さな妹の、琴の昼食である。俺の昼食はトーストで、キムチを上に乗せ、その上に更にとろけるチーズを載せたものをオーブンで焼いている。

その琴は、リビングのコタツ（電源はオフ）でのんびりと、だいぶ前に放送された番組の録画をブルーレイで見っていた。

『トキエエエエエエエエ』

テレビのあるリビングから、そんな声が聞こえてくる。紛れ、嘲笑も聞こえてくる。

もう、何度となく見ていたから、だいぶ笑い声のボリュームは減ったな。

俺は小鍋に入ったラーメンに一つ、卵を落とした。卵綴じにするためだ。琴は、ラーメンの麺に卵が絡むのが、堪らなく好きなのだ。

卵を軽く、遅く、かき混ぜる。白と黄色の身が麺や豚肉の上で、固まってくる。よし。

俺は小鍋の中身を、そのまま、ゆっくりと、ラーメンの皿に移した。

その後、上にすり胡麻を振り掛け、リビングのコタツの上に置いた。

「ふぉ〜。豚骨さーん」  
テンション上昇、琴。

ラーメン皿を掴みながら「あつたけー」と言って琴はニヤけた。

そしてズルズルと啜る。

俺は「麺、伸びてないか？」と聞いた。

トーストと一緒に作っていたから、伸びていないかが不安だったからだ。

「んー大丈夫だよ、ありがと」

なら良かった。

コタツに入り、湯気で白い顔を桃色に染めながら食べる琴を数秒見ていたら、オーブンが音をたてた。

俺はトーストを食べ始めた。

「一口ちょうだい」と琴が強請るので、トーストを琴に貸した。

『がぶっ』。そんな音が聞こえそうなくらい、一口が大きい。四分の一くらい食べられた。食い過ぎアホ。

「じゃー肉少し、くれ」

「はい、あーん」

「んー」

バラ肉旨いわー。

「はい、あーん」

「え？ 麺はいいよー」

「いやあ。今さっき、あーんにハマってしまって。あーん」

「んー」

麺、伸びてんじゃん。

「おいし？」

「俺が作ったからね」

可愛い妹は微笑んだ。

俺は琴の、黒炭色の細い髪を撫でた。

兄の友達

午後2時。

ピンポーン

誰かが来たらしい。

「久しぶり」

少し赤みがかった黒い髪、緋色の大きなクリクリ目、細くもろそうな指、十九歳の男の割りに高すぎる声、細身のカラダ。言われなければ女と見間違えいそうな中性的な男性が玄関内にいた。

「久しぶりー、くるたん」

そう言った返事をしながら、俺はそいつに軽くハグした。

細いな。肉を食えよ。

くろたんのリアクションは、抱きしめていたから分からなかった。

肩が愉快地揺れていたの、笑っていたのかもしれない。

「まあ、あがれよ。玄関閉めてな」

「うん」

「くろたん!?!」

リビングに戻ると、琴がもともと大きな目を見開いて、ポケモンのプリンみたいな目になっていた。マジでけえ。

「くろたん!」

くろたんの細い首に琴の細い腕が絡まり、  
「うわー！」

くろたんと琴がコタツの脇に倒れこむ。

「久しぶり〜。三週間ぶりじゃない？」

「う、うん。その、くらい」

仰向けのくろたんの上から話しかける琴。くろたんの胸に肘を付けている。そして上から笑いかけるのだ。

「くろたん……」

「あ……う……」

「ゲームしよー」

ただでさえ女が苦手なくろたんは、小学五年生（今年で六年生）  
とはいえ女の子の琴に、超至近距離で笑いかけられ、顔を真っ赤に  
していた。

「う、うん」

そのため、返事がワンテンポ遅れたのだろう。

「っーかね。お前が将来小悪魔にならないか本気で心配だよ、琴。」

「お兄ちゃん、も一個のDSはー？」  
「ベッドのところに無いなら知らねー」  
『ほんとっすかー？ 先輩たまにウソ付きますからね』  
「こんなことにウソつかねー……っか、いつからいた？」

コタツの中から曇り声が聞こえたから、俺はそう問う。

しかし答え無く、コタツの中で何かかがもぞもぞと動きだした。

そして俺の正面に、ひょっこり『ソレ』は出現。

茶髪のポニーテールに、強気な目。凛々しく少し焼けた顔で、「  
剣道してます」って感じの中背の女の子。俺の1つ下の後輩。

名前はリン。

「ういっす！ ウチの卒業式以来っすねえ、皆さん。いつから来たかというと、黒民先輩がドアを閉める寸前だったっす、確か！ そしてー！」

顔をクワツ！ としたリンは、くろたんの頬を引っ張る。グイグ

イト。

「相も変わらず。ほっぺたやわいっすねえ、黒民先輩」

「うあー」

触りまくり、にへら顔。

そんなリンの頬を、くろたんの上からペタペタと触る琴。

「っーかリンちゃん、DS持ってきてない？」

「ないよー。うわー、琴ちゃんもやわやわ、やわ〜」

「でしょ　リンちゃんもやべー」

「あ、ああ。琴ちゃんに、リン、やめて」

左手でくろたんを触りながら、琴も触るリン。二点攻め。

琴もくろたんの胸板に指置く指を軸にして、ブレるたびカラダを矯正して、バランスを保っている。

くろたんの上で、繰り広げられるペタペタ戦争、なぐられ天国。  
女男女。

俺はコタツの端でポンカンを食べている。

うまい。うまい。ポンカンは旨い。

で。DSの話はどこに消えたやら。

「うあー、うあー。やめてー」

……俺も加わるか。立ち上がる俺。

「うあああああああああはあっはあっはっ！ ひい！」  
「おお、お兄ちゃん！」「プロっすねー」

午後3時。

「こんにちは」

志太という男の子が来た。

琴の友達だ。

ハーフだからだろう、薄青い目と短い金髪を持っていて、身長も小学生にしては高い160センチもあり、いつも微笑みを絶やさないことが特徴だ。

そのため、付いたあだ名は微笑み紳士。

「ずいぶん遅かったな。どうしたんだ」

「馬がないからね」

「え？ あー。小太郎な。どうしたんだアイツ」

ニコニコと微笑みながら頭に着けていたハットを外し、手で包むように持った。

「春休み中は来ないらしいよ」

「え？　なんで？」

「休暇取らなかつたんだって」

「え？　なんで？」

「夏にとつとくタメだつて」

「え？　なんで？」

「夏なら、『女性三人の露出度高くなるじゃん？　だから夏にとつとくんだよ。あつはつは』て言つてたよ」

性的全年齢対象変態男が。

「まあ、あがれよ志太」

にこりと微笑み「おじゃまします」。

「おー、志太クン」

「昨日ぶりー」

琴と志太、『ぱちっ！』ハイタッチ。

「今日は遅かつたねー。なんでー？」

「略」にこり。

「あー。そいえば小太郎ちゃん、いないね」

「略」にこり。

「えっ、なんでー？」

「略」にこり。

「えっ、なんでー？」

「略」にこり。

「ええっ！」赤面琴。

「コツチンは本当にアホっすねえ」

「うあー」

いまだ、くろたんを引っ張っているリンは、呆れ顔だ。お前に呆れるよ俺あ。

午後7時。

その時間までずっと、皆でウィーをしていた。

マリオテニス、マジはんぱねえ。

「あー、行っちゃうんすね黒民先輩、しーちゃん（志太）」

二人の足にしがみつくりん。

「ま、た来るよ、りん」

「バイバイ、りんさん」にこり。

「あー。バイバーイ」

手をフリフリする琴。

『ガチャン』

玄関から、リビングのソファに戻る、俺と琴とりん。

ん？ りん???

「つーわけで、今日泊まりますねー、先輩」

「どごゆづわけで？」

「ダメっすか？」

まあ、いいけど。

「じゃあ、リンちゃん、マリテニもつかいやろー？」

「ふふん、ウチのプロペラハイホーに勝てるかな!？」

「ふふん、勝つよ。お兄ちゃん、ダブルス組もー」

「じゃあウチは、星葉ちゃんと組むっす！」

「あはん 星葉ちゃんのハナチャンは、何者にも負けないさ」

「負けねー! お兄ちゃん、勝つよ!」

は？

いやいや待て待て。

俺の横から全身をコタツに入れていた(らしい)星葉が、首だけを出していた。

お前、いつからいた？

「瞬間移動で来ました」

どこのスーパーサイヤ人だよ。

「それ、ウチの技だ！（パクんな！）」

それは違う。「パクんな」違う。

「それ以前に答えになってないよ星葉、アホ」  
「すみません琴さん」

立ち上がって、琴に頭を下げた星葉の髪の色はピンクで、右横に星形の黄色のバレッタをはめており、下げた顔の斜め横から見える顔は、

こんな（ ）感じになっていた。顔文字レベルの顔なのだ。

「ところで琴さん」

「んー？」

「この前DS借りてってたんだけどね」

「んーああ、そっか。星葉に貸してたのか」



「先輩、マリテニしましようぜー！」

「ん？ ああ、うん」

俺はノコノコをプレイヤーキャラにした。

琴さん、漏らす。

3月27日。

午後2時。

コタツにはくるたんが横になって、ウチにあつた東野圭吾の推理小説を読んでいた。その横ではリンが寝ていたが、

無意識なのか、それとも本当は起きているのか。リンはまた、頬を引っ張っていた。「うあー」

冬休み終わる頃には、ブルドックにでもなっているんじゃないかなるか。  
うか。

向かいには琴と星葉がいた。二人も寝ていた。

しかも星葉に至っては、星形の鼻ちょうちんを作っている。少しは人間らしくしてほしい。

ちなみに、なぜみんな寝ているかというと、昨日オールしていたからだ。

俺は早々に眠りについたが。

だから女性陣は眠くなって、今眠りについているのだろう。

しかし。琴にはあまり、夜更かしを覚えさせたくはないのだが。

日頃、家事をほとんどせず、朝もまともに起きれないのに、夜更かしまで始めたら、だらしないことこの上ない。まるでダメな女、略してマダオだ。

1月のときは12時には眠りについてたというのに。なにをパワーアップしているのだ妹は。

コタツ横のソファーに座り、ポンカンをむさぼりながら、そんなことを考えていたら、くろたんがいきなり歌い始めた。

「青い空に高く、今なら飛べるかな。

もしこのまま落下しても、今はそれでいい」

サビのようだった。……なんの歌だろう。てゆうか何で人が歌ってると、恥ずかしくなるんだろう。

「それ、誰の歌？」

「ん？ あ、ああ。はね、大塚愛の『羽ありたまご』」

「へー。大塚愛にしては、落ち着いた曲だな」

すると軽く微笑みながら、くろたんは言った。

「今度持ってくるから、聞いてみて」

俺は、「楽しみにしてる」と言って、ポンカンの皮を剥いた。

このポンカンの、身のしまりっぷりが堪らない。

午後3時。

志太が来た。

「あれ？ 女性の皆さん、お昼寝タイムなの？」

その言い方を聞いていると、とても小学生には思えないな。

説明。

「あはは。そういうことか」

しゃがみ、星葉の鼻ちようちんを割りながら笑う志太。

「ふきゅん」「(寝言)

すると直ぐにまた、星形の鼻ちようちんが出来上がる。強し。

志太は、琴達とリン達の真横の方向を陣取った。そして思いついたように口を開く。

「そういえば、この3人だけの組み合わせって、初めてじゃない？」  
「え……？ あ、うん、そだね」

くろたんが答えた。

確かになあ。

しかし……話すことが何もないな。

くろたんは話さなくても、いるだけで落ち着くし、志太とは喋るというよりも、事務的な会話ばっかだしなあ。

小太郎とかなら、けなせばしゃべられるんだが。うるさい奴だと話がしやすい。

ああ、そうだ。じゃあ志太のキャラを解剖してみようか。

「なあ志太」

「なに？」

「お前って学校じゃ、いつも何をしてんの？」

「んー、昼休みはバスケットかな」

「あー。そういえばお前、バスケット上手いもんな」

「あはは。やっぱね、太りたくないからね」

「やる理由ソレかよ」

おっさん臭いな。

ちなみに、くろたんは推理小説に老けている。

「俺も湯鷹 ゆたか クンに聞きたいことあるんだけど」

湯鷹というのは、俺の名前だ。

「なに？」

「なんで童話作家になろうと思ったの？」

「そりゃあ、子供に見てほしいからだよ」

「へえー……。でも、それでもよくなれたね」にこり。

「うん、まあ、奇跡に近いね。シュウさんって覚えてる？」

「あー、雪合戦のときの、あの？」

「うん。俺、取り合ってくれたのが、あの人じゃなかったら（童話作家に）なれてなかったかもしんない。

『君の文章はイマイチ読みにくいけど、ストーリーは暖かくて良いね』って言ってくれてさ。

まあ、そこは生意気にも文章力もあるわボケとか思ってたけどね、そのあと知り合いの作家紹介されて、色々教えてもらって、それがキッカケで今の今まで仕事できてんだから、結構感謝してる……な

んか、難しい話だったかな？」

いつもは糸目の志太の目から、青い光が見えた異常さに、心配になって問う。

「ううん、大丈夫。ただ珍しいって思っただけ」

「珍しい？」

「うん。そんな饒舌な湯鷹くん、初めて見たから」にこり。

また、いつもの微笑み紳士へと。

「真剣さが伝わってきて、面白かったよ。俺も、そんな真剣になれる職、探して、掴み取りたいって……そう思うくらい」

志太は、いつもの微笑みを浮かべている割に、その言葉は熱かった。

熱いとは分かっていたが、冷やしてみる。

「まだ小学生なんだから、そんなこと思ってたら、老けるぜ」

しかし、言った自分が、ゾツとした。

こいつは、まだ小学生だろう。

なのに、なんでここまで丁寧な雰囲気を出せるのかと。口先だけでなく、芯まで熱い言葉をなげ出せるのかと。

そう思うと、ゾツとした。

同時に期待。

この目の前で微笑む小学生が、これからどんな成長をするのかという、期待をした。そんな俺の顔にも笑み。

横で推理小説を読むくろたんが「凄いなあ……」と一人、呟いた。  
うーん……。

午後5時。星葉除くの、二人が起きた。

「お兄ちゃああん、喉が乾きまくってるようあああああミルクかオレンジジュースージュースージュースーくれお」

琴は眠気まなこをゴシゴシこすったかと思うと、せっかく起き上がっていたのに、また倒れ込み、横の、幼児体型の星葉の腹にムチヤクチャ絡まる。ていうか今の寝言か？

「星葉あ。星葉〜」

いつもは避けようとしてるハズなのに、寝ぼけているときの琴は、ツンツン成分を忘れてるらしい……。

「琴ちゃん可愛いつすねえ」

リンがポンカンを口にしながら言った。

「お前は寝ても覚めても、何も変わらないな」  
「へ？」

「うあー」  
リンは左手で、くろたんの顎下をいじくっていた。

「うあー」  
もはや完全にネコ扱いだ。

「ふきゅん」  
志太はというと、星葉の鼻ちようちんを割って遊んでいた。

星葉ちゃん、やる

3月28日。

午前11時。

東野圭吾の推理小説を借りていたくろたんが、その本を読み終えて家に持ってきた。読むの速っ！

「でも、午後から来れば良かったじゃん」

「よ、よみ、読み終えて直ぐじゃないと、忘れちゃうから」

「あはは、まあ中に入れよ」

「う、うん」

なんだろうか。くろたんがオドオドしていると、妙に面白い。

\*

「おお？ くろたん今日は早いね」

コタツから首だけを出している琴は、こっちに全力で「ぎよろん」と振り向いた。ホラーかよ。

「琴お前……暇人だなあ」

「だってすること無いもん」

無いもん無いものと、そうつぶやきながら首を左右に振ったり首（本体も）を回転させたりする。細身を上手く使った芸である。

琴がやるから可愛いけど、他がやったら相当気持ち悪くなりそうな芸だ。

「じゃあ久しぶりにどっか行くかあ」

俺は頭を掻きながら言った。

「まじで!?!」

琴はガバツとコタツから起き上がろうとしたが、深く入りすぎていたからか、肩が机の部分に当たり、結局もとの通り首だけの状態で話を聞いていた。

「今日どっか行きたいの?」と俺が言うと「毎日新聞!」毎日行きたいと返ってきたので、「却下」。

「はい、今日行きたいのです。行きたいとです。琴です」

余程退屈していたのか、だいぶテンションがおかしなことになっている。

まあ毎日家に籠もりっぱなしなんだから、仕方ないといえば、仕方がないのかもしれない。

「じゃあラウンドワンにでも行く？」  
「行く！」

俺は、立ち上がるうとする琴のおでこを抑えた。ぐぐぐぐぐぐつ。

「行けないい〜。行きたいのにい」

抑えたまま、棒立ちくろたんにも訊く。

「あ、うん、行く……あ、でもお金が、あんまり……」  
「俺が払うから気にすんな」  
「……ありがとう」

「貸しだけどね」

「え？」

さて。残りメンバーも誘ったところ。

「その前に離してえ〜！」

じたばた。

集合。

「ラウンドワン、行くの久しぶりっすよ」

リンがくるたんを「うあー」しながら言う。

「俺もー。てかさ、お金ホントに良いの？」

志太が俺の方に向かって言う。

「ああ、小学生組のカネは払うよ。くろたんには貸し、リンは自腹な」

そう言うと、志太はかぶっていたハットを取り、お辞儀をした。微笑み紳士、相変わらず小学生の次元ではない。

「わーい。さすがはmyお兄ちゃん！」

琴が抱きついてくる。俺は頭を撫でた。

「ケチー！」「うあー！」

リンがくるたんを振りながら言う。ケチーで結構。

「ケチー」

いや、お前は払ってやるって。

「なーんだ　さすがはmyボス　」

星葉がウインクして、　　が飛んできたぎあああああああああ  
あ！

（注：星葉はウインクの時に発生する　を刃物にして、飛ばすこと  
ができるのだ　）

全員を車に乗せて、俺は車を出した。俺の右目には　　が刺さって  
いる。

はい、到着。

「速っ！　お兄ちゃん着くの早いね！　一行でついたよ！？」

助手席の琴がビックリしている。

「それはあれだよ、ほら俺、テレポーターション使えるから」

そして俺たちは、ラウンドワンの中に入った。

「じゃあなにしようか？」

「ボーリングしょ？」にこり。

「ボーリングな。じゃあ行くか」

受け付けに行く。

受付嬢が俺の右目を露骨に見ながら、空いている席の番号を教えてください。

六人では出来ないため、俺と琴がペアになり、志太と星葉がペアになった。なんか志太のペア、オーラが見えるんだが。

オーダーの順番は、1・俺と琴、2・リン、3・くるたん、4・志太と星葉だ。

俺と琴は1レーン毎に交代する。星葉たちは一球ごとに交代するらしい。

1レーン目。琴の投球。

ゲーター。ゲーター。

「壁立てる？」「俺が言つと」「勘弁して下さい」と、泣かれた。まあさすがに恥ずかしいか。

仕方ないので、俺たちも一球交代にした。

リンは、普通にスペアを取った。

「あはは、ウチをナメたらあかんぜよ！」

さすがは元祖・普通。きつと、最後は普通にそこそこの点数を取っているだろう。

くろたんもガーター。まあなんとなく予想はついたよ、うん。  
「久しぶりにやると、難しいな……」

で、志太の番。なんか手袋はめてるよワイ

『がこーん』

「あはは」「キラリ。」

ストライクだよ、ワイイ！

はあ……。なんだ、このボーリング。どこのベッタベタコメディだよ。テニスの王子様かよ。

「そんなベタベタを　洗い流してあげよう」

そう言って、星葉は先端が　なステッキ（折りたたみ式）を、バツグから取り出したイタタタ。

「ううおらあああ」

それを振った。ウインクもした。しかし、何も起こらない。どくどく。

「お兄ちゃん、左目にまでスターが！」

「いえーい　ボスのダラダラお目々に星の光を灯したよ」

無視して、俺はボールを投げた。

『がーん』

「うわ！　先輩もスゴいっすね」

ストライクが出た。運が良い。どくどく。

リンが投げた。

『がこーん』

「うおー！」

ストライクだ。2連チャンかよ。

くろたん。

『がこーん』

「…………お、おお」

ストライク…………だと？

星葉の投球。

『がこーん』

「あはん」

ストライイイク。バッター、アウトー。どくどくぶじゅー！

「うわー！ お兄ちゃん目が！ 目があー！！」

肩をガシツと掴み、「星葉」。

「ナンですかmyボス」

「なんだコノ、スーパーストライクゾーンは。なにした？」

「イタズラ」きゃぴーん

『どかーん』

「ふんぎゃあ」

頭を抑える星葉。頭の周りで星が舞っている。

「なにをする」

「殴った。目が痛くて痛くてね」

「イタズラに怒ってるんじゃないんだね」

「それもある。さっさと直せ。そして俺の目も治せ」

「いやん 怖い」

「つーか、イタズラで済ませるレベルのワザっすか。コレ？」

リンの言うことも最もだが、もはや人の域を超えたコイツに其処まで突っ込んでもムダだろう。

とりあえず、解かせる。

「星葉待ったあああ！ その前に、ワザ解く前に、」

琴があたふたしている。ああ、なるほど。

「最後にストライク取りたいんだね」

「イエス！」

琴がこちらを見る。まあ琴は、なあ……。。

そう思い、俺は首を縦に振った。

顔がキラキラに輝く琴、まるで太陽。

「うおおううらあああああああ」

それは正にストライカーの雄叫び。

ボーリングの球が、ピンまで飛んでいく。ん？ 飛んでるう！？  
いいのコレ！？

『ばしゃああああん』

「ストライクウウウウツ！？」

何てことだ。ピンに触れた瞬間、球が粉々になってしまった。ど  
うゆう理屈だ、星葉。

「大なる力の前では破滅のみ」

「うるさいわ」ぱしっ。

「いゃん」

しかし、どうするか。ボーリングの球壊したことなんて、そうそ  
う容易く見逃してくれないだろう。

琴はあたふたしている。

「ボーリングの粉って美味しいかな」

アホ言うな。

「ごはんに振りかけて、食べてみれば？」にこり。

微笑みながら毒味を促してやがる。

仕方ないな。あれを使おう。

家に着いた。

「楽しかったな」

「そうだね、お兄ちゃん」

そして俺達は家に入った。

オールオツケー！

「ああああああ先輩まで超能力をうああああああ！」

「まあまあ、落ち着こうよリンさん。キヤラ崩れてるよ。ほら、みひろクンの頬でも触って落ち着こうよ」にこり。

「え、えええ！？」



甘えさせてよ、お兄ちゃん。

3月29日。

午後4時。

「お兄ちゃん、おはよー」

「琴が今、やっと起きた。」

「昨日は帰ってからも、ウィーでカラオケして遊びまくったから疲れたのだろう。ん？」

「琴、動くなよ」

「へえ？ う、うん」

「俺は指を琴の眼球の端に軽く入れ、出した。よし、取れた。」

「んなにー？」

「目やに」

「あーなる」

琴は目をこすった。少しかがんだダルそうなそいつの黒炭髪は、寝癖でボツサボサになっていた。

「寝癖なおしてきな」

「ほいほい」

琴が洗面所に行った。

今日は久しぶりに、二人だけだ。

琴は俺と二人だけのとき、別人のようになる。

だらしなさ、わがままさ、甘えさが強くなる。

いつもは恥ずかしいからなのか、昨日のように特定なときしか抱きつかないが、常にベタバタしてくるようになる。最近は特にだ。

「はあー。お兄ちゃん」

洗面所から戻ってきた琴は溜め息みたいなのを漏らしながら、座っている俺の頭を抱きしめながら、おでこを撫でてきた。

「お兄ちゃんは何で、ボサボサにならないのよー？ もうちょい、だらしくなるよ」

「俺だって、充分だらしないと思うけどね」

皮を剥いたポンカン1ふさを琴が見つめていたから、それを琴の口の中に入れながら言った。ポンカンと一緒に、指も食べられる。

「これ以上ダレたら、お前を養えないだろ？」

「……んふふ」

俺の指を含んだまま、琴は顔を紅潮して笑う。指の先に生暖かい舌が撫でるように触れてくる。

指を包む唇は顔を洗った際の、湿りがまだ残っており、ちゅぷつと音がたつ。

琴が俺の太ももに頬を付けた。納得したなら、そろそろパジャマを着替えてこい。天然で誘惑されても困る。

「そろそろパジャマに着替えてこい」

「いいじゃんよー。いーいーじゃん」

太ももの上でコロコロ頭転がる琴。

胸の辺りがぞわぞわする。

ああ、むちゃくちゃにしたい。

それを理性で斬る。

「ちょ、あんま顔押しつけんな。くすぐったいわ」  
「いっひっひ」

怪しい笑い方をしながら目を細める琴。

「ああ。いやあ、お兄ちゃんの男くせえ匂い、めっちゃくちゃ好き  
なので。ああ、もお……」  
「あほ」

デコピン。ばちん。

「いたつ。デコピンの名手が」

「そんなに強いか？」

「めっさ強い」

そう言つと、琴は起き上がり、膝立ちをして俺と視線を一緒（身長伸びたなあ）……いや、少し高いに配置して、デコピンをし始めた。ばちん。

「ほらあ、音、ぜんぜん違つもん」

「ああー。まあ、うん」

ばちん。ばちっ、ばちっ、ばちっ、ばちっ、ばちっ。

「うおい。さすがに痛いよ」

「さいですか」

「さいですわ」

琴の前髪をめくる。真っ白なおでこ（いや、少し赤いか）……いや、少し赤らんだおでこが見えた。

「ほらな。お前のおでこより赤いじゃん」

ケータイを鏡にして見比べた。そのなかでも俺は琴を見ていた。

「あー、マジだね。お兄ちゃん赤くて可愛くなったよ。良かったね」  
「ああ、そうだな。ありがとう琴……」

俺はデコピンをした。ばちん。

「ふおお、強し！」

おでこを防いで、うなっていた。

午後7時半。

「ああ、もおこんな時間か」

DSテトリスに、熱中し過ぎてたな。

「琴。俺、メシ作ってこなくちゃ」

そう言っつて、DSの電源を切った。パタン。

「えー。もっとしよ?」

琴は、立ち上がろうとする俺の胴体を、両手で抱きしめながら、俺の腰に自分の両足をスルリとまわし、お尻を股の真ん中に置いて、座り込んだ。

頬にかかる息が生暖かい。女満別。

(前から思ってたけどコイツ、子コアラみたいだな)

ちなみに。琴のソレは意味を成さず、俺は普通に立ち上がった。

「あー。ちくしよー」

「お前は軽すぎるの」  
「うー……」

俺の肩を枕にする。

「お前さ、少しは俺離れしろよ」  
「……やだ」

俺の首もとから「ちゅく」っという音がした。

びっくりして、琴を見ると、至近距離すぎて更にびっくりした。  
当たり前なのに、びっくりした。琴の目が潤んでいて更に更にびっくりした。

「……やだあ」

馬鹿ヤローか、コイツ。

お前は、妹なんだよ。

そっつう感情は止める。

コイツは、妹なんだよ。

そういう感情は止める。

「大げさな奴だな、お前。メシ食ってからでも良いだろ。ゲームな  
んざ、いくらでも」

「ゲームのこと、じゃないよ……」

「は？」

「お兄ちゃんから離れたくないの……」

ああ、そうだな。そうだね。そうだよ。

「俺からは、離れないから」

きよとーんby琴。

「本当に？」

俺は、琴の涙を唇で吸った。琴は少しびくついていて。火を見て  
臆する犬の様。

コアラのお尻に腕のイスを置き、コアラのあごを持ち上げて、俺はその目を見て「ああ」と言った。

そして俺は、冷凍庫を開けて氷を持てるだけ持った。

そして、琴の背中にすっかり氷をこぼしてしまった。うっかり一つも残さず。

「あっ、あっ！ お兄、ちゃん！」

じたばた。

俺は二本足で立ち上がるコアラに、言った。

「リビングで、テレビ見てなさい。すぐ出来るから」  
「もお……。濡らさないでよ。冷たいよ」

後ろから見ても膨れっ面な琴の背中は、真夏のようだ。

チャーハンでも作ろう。今は、簡単なものしか作れそうにない。

男の子ですね。

1月30日。

午前1時。電話がきた。

『小太郎』

「おう、湯鷹。なんか困りきつた声だな」

あん。あん。あん。あん。

『ああ。お前は変態だから、いざという時の頼りなんだ』

あん。あん。あん。あん。

「へえ。どした」

あーん。あん。あん。

『お前は自分に妹がいたら、好きになるか?』

はあ。はあ。はあ。はあ。

「なるんじゃね? 家族だし」

うっ。くっ。ぶっ。あっ。

『お前、今彼女何人いたっけ?』

はあっ。やべっ、はあっ。やべっえっ。

「いやいや一人しかいねーから」

『へー』

「おおい。いい加減にしなさいよ」ノヤろっ

うぶっ。ひい。はっ。はっ。はっ。

『お前、琴好きだったっけ?』

はい。はい。はー。はい、はあ。

「あー。すっげえ可愛いね。撫でてあげたい」

うん、ん。はあ、はあ。

『俺、わけ分かんねーか？』

ひいっ。ひいっ。ふう。

「んー。病んでるだけだろ？」

ひいっ。ひいっ。ふうふうっ。

ぴっ。キュルキュルキュルキュル。

『かもな』

ひいっ。ひいっ。ふうふうっ。

「俺がお前と話すのは、癒やされるからだけ。お前クールだもん、

馬鹿みたいに」

ひいっ。ひいっ。ふっふっふっ。

『外面は、だろ?』

ひいっ。ひいっ。ふっふっふっ。

「うん。でも俺に対してはマジでクールだから。俺のことマジで好きじゃん、お前。あっ、友達って意味だけ?」

ひいっ。ひいっ。ふっふっふっ。

『分かってるよ。冬休みのときのリンの話だってお前にしかしてないのは、俺もお前が好きだからだよ』

ひいっ。ひいっ。ふっふっふっ。

びっ。キュルキュルキュルキュル。

「うわ! きもー!」

ひいっ。ひいっ。ぶづううづ。

『てめえ』

ひいっ。ひいっ。ぶづううづ。

「いやいや、だってお前がそんなに素直なの初めて見たからさあ。そんな昔のこと引つ張り出したり、人を好きだって言ったり。氷割ったお前と話すのなんて、久しぶりすぎたからさあ……」

ひいっ。ひいっ。ぶづううづ。

『そっだっけ』

「ああ。だからくるたんも、お前の近くにいたんだぜ？ お前が氷ばりのクールだから。だからリンも、お前を諦めたんだぜ？ お前を嫌えないから、まだ近くにいたし、友達としててきなバカなことも考えてるけど」

ひいっ。ひいっ。ぶづううづ。

『バカじゃねーだろ』

「てめーが中途半端に傍観してるのが、そもそもの原因じゃん。ラダトームの城をようこそ！ て言えるくらいの傍観者になれよ。中途半端、優柔不断スパアアアアンて感じで。今のお前の優しさ、研いでない刃物みたいだぜ？」

『よく分からん例えだな』

「じゃー、研いでない包丁だ。料理しまくってるお前なら分かるでしようよ」

ひいっ。ひいっ。ぶづっ。ぶづっ。

『あ。ああ。あーなるほど』

「分かったな？ で？ 琴がどうしたんだよ？ アホみたいな流し読み思考な会話やめて、本題入れや。おっ」

ああっ。くるっ。くるっ。

『琴が俺のこと好きらしいんだが』

うううううううううううう。

「良かったね」

『……………』

ああああああああああああ。

「……………」

『恋愛対象としてらしいんだが』

あああああ。あああああああ。

「じゃー冷たく接しろ。メシ作って風呂沸かしてやるだけ。思春期になってもそんなアホみたいなこと言ったら相談しな。近親相姦イコール阿呆。おーけい？」

あああああ。あああああああ。

『それが出来ないから、』

あああああああつ。

おめでとつございます。

「お前も危ない好きに溢れてることは分かってるよ。だから最近、俺を呼ばずに志太だけを呼んでるんだろ？（俺が仕事だからって理由付けてさ。いざって時は、いつも強引なくせしてさ。）バリア張り直すまでの立て札替わりにつつうのと。俺が休み取らなくて怒ってる腹いせってわけでもなく、邪魔なくゆっくり話してもらうためにだろ？ 二人にさ」

男の子ですね。

『……ん』

「不器用マンが。どう考えてもムリに決まってるんだろ？ 俺の弟だつて、好きな奴は星印なやつなんだし。それぐらいはお前でも分かっているだろ？」

産むとき、感じたでしょう？

『ああ。ああ』

「ええつ。お前マジか」

びっ。

「……あー。まあ、いいや。そつちの話は脇な。で、琴の話だけど、相手はまだ小学生で、しかも妹だから、人が好きつつうかお前が好きつつう気持ちかどうか、まだ判別できてないだけだから。だから、お前がいないと死ぬレベルになるくらい触れ合い続けられないように心がけな。お前らベタベタしすぎだからさ。さっさとくつつけていうくらい。中学生になりや少しはマトモな奴見つけて交尾するよ。たぶん。まあ、だから気にすんなって。それでも不安なら『好きになるな』って実際に言えば？（我ながらアホみたいなこと言ってるな……）脳内ではっかツッコミ入れてたら、口の筋肉、退化するだけだぜ？ 好きなら犯せ。大切ならシカトしな」

『ああ。分かった』

「じゃあな」

俺はケータイの電源を切った。

こいつ、ぜってえ分かってねえな。つーか、俺もダラダラ喋っただけで大したこと、言えてねーし。つーか、俺も大した人間じゃねーっつの。あーあ。

はーあ、アホらし。

あーあ。ビデオの内容、全然入らなかったよ、もっかい見よ。だいたいなんでエロスパイオ担当の俺が熱血節介焼き焼きモモンガ百パーセントを演じなきゃあならんのだ、アホか。アホアホアーホ。

「志太、さっさと寝ろよ」

背後でシャカシャカ歯を磨く弟に言った。

そいつは微笑んだ。

\*

湯鷹。お前の悪いところは、綺麗に言えば優しすぎるところだ。だから勘違いするんだぜ、リンも。

安易に愛情を振りまくな、すげえ残酷なことだから。

「ああ……これだよ。これを言いたかったんだ。ああ、もお」

話し終えたあと、言葉が沸くの、やめてほしい……。

頭を抱え込んだ。

くるたん、育成計画。

3月31日。

午後5時。

「星葉」

「お」

星葉が目をパチクリしながらコタツ横のコツチを見る。飛んでくる星、寸前でかわす。

と見せかけて、肩に刺さる。うほほーい。

「どうしたんさ　なんか叱られるようなこと星葉したかさ」

「んーん、別に。ただ、お前って好きな奴いるのか聞きたくて」

「え、ええつ。なに言ってるんさ！」

星を付け忘れている。

「例えば志太とか」

今志太はいない。琴はうんこ中だ。くるたんは向かいで本を読んでいる。

「ん、んんっ。別に、ただの友達さ」

ああ、やっぱりか。

両思いか。きゃあ。

「小学生でも恋するんか」

「それは小学生なめすぎさ」

「まじで?」

「まじさ」

「それは星葉も恋を、」

「んん!? あーあーんんんんっ」

咳払いしまくりだな。

コイツ、何気に恐ろしく可愛いのでは?

とりあえず肩に刺された星を抜いて、机に置いた。ぷしゅー。

「……あ。あああごめんさ」

顔の赤さは、小太郎にパンツ見られたときくらいある。

「くろたんは恋してる?」

「え。え? いや……て、いつか血しぶき!」

横向く。肩ぶしゅー。俺はおそらく短命だ。

「ボスの血、噴水みたいでキレーさ」

ああ、なんでマトモな人がいないのか。きっと俺がマトモじゃないからだ。

だって、そりゃそうだ。妹を好きだなんて異常じゃないか。しかも小学生だ。シスコンの上にロリコンか。俺の人生終了だな。

「どうしたんすか先輩。いつにも増して眉間にシワ寄せて。シワシワですよ。シワシワダンディーですよ。そんなに早くにお爺ちゃんにならないで下さいよ」

キッチンからクッキーを持って現れたリンは、俺の向かいに座った。横の略「うあー」。なんとなく久しぶりだ。

そしてくろたんの口にクッキーを無理矢理入れる。

「そんな嫌がってちゃダメっすよ。ほらクッキー早く食べて下さい」

「うぐっうぐっ」

「ああもお、ポロポロこぼさないで下さいよ。もお。ああそっだ。

下にティッシュひいときましようね」

「うぐっうぐっ」

頬を引っ張りながら。鬼だな、リン。

でも。くろたんが可愛すぎるから、いじりたくなる気持ちもよく分かるよ。

「で。先輩はなにをそんなに難しく考えているんですか」

「ああ。実は、」

「うぐっうぐっ」

話しくいいなオイ。

「リン。一旦、弄くるのやめないか」

「あはは、そうっすね。』一旦『止めましようか「ニヤニヤと。」

リン、にやり。

俺、ニヤリ。

星葉、にっこり。









自分が信じる相手。

4月1日。

午前11時。

「おはよー」

琴が背中にぺたりと引っ付く。

コタツの電源は点いていない。ソファーに寄りかかれないので、後ろで膝立ち中の琴に寄りかかる。

背の小さな琴は、膝立ちして俺の座高と高さが同じになる。いや、正確に言えば、少しだけ琴の方が高いが。

だから、寄りかかると琴の顔が隣に来て、その顔を覗くには上目にならないといけない。

目を合わせると、琴は口を薄く開いて、俺の目の前を唇が通行。鼻にキスをしてきた。

視界が真っ白な首で塞がれる。

三日前くらいから琴は、二人のときはキスとかも、してくるようになった。

もう、ダメらしい。

たとえダメでなくとも、俺が諦めたくて堪らないのだ。

何の為に、あいつらから色々聞いたのか。

分かっていたけど、いちいち思い出せるほどの力も無い。

とりあえず今は、愛しさを妹にぶつけることにした。細い体だ。

脂肪の少ない胸は、鼓動が聞こえやすかった。どくどくと。

琴は胸のところにいる俺の、頭を撫でて、頬を俺の頭につけている。

たまらなくて。その顔を覗く。

紫がかった黒い瞳が、優しく潤んでいて、その下にちょこんと付いている小さな唇が

何度も、何度も、おでこにキスをしてくる。

『俺』が小刻みに震える。涙が顎まできて、静かに落ちる。

「お兄ちゃん？」

琴が気付いて、心配そうに眉を細める。

「大丈夫だよ……」

琴が冷たい手をぴたっと、俺の頬につけてくる。

「本当に？」

二度は言わずに俺は、琴の背中に手をまわした。

軽く、潰れないように軽く、抱きしめる。

柔らかい。温かい。

いいのだろうか。甘えても。

いいのかな……、甘えても。

妹に、甘えても。

俺が甘えることで、琴を、傷つけないかな……。

「痛いよ、お兄ちゃん……」

琴の声に、気付く。いつのまにか、強く抱きしめていた。

「しめん……」

やっぱり、ダメだ……。そう思って、離れようとした。

「離さないで……」

琴の目を見た。涙が頬に落ちてきた。

「痛くても。痛くしていいから……、離さないで……」

泣きながら、笑っていた。幸せそうに、泣いていた。ダメだ。

泣かないでくれ……。

「お兄ちゃ……うん」

唇を重ねた。熱くて、みずみずしい。

「おにい……ふう……あ」

存分に、甘えようと思う。

そんな俺が、俺は。

「琴……」

唇を離した。

「……お兄ちゃ、んう」

そしてまた、重ねる。

琴の細い腕が、俺の首を軽く絞める。

首を刈り取られ、俺の体は溺れていく。

琴、琴、「琴……」。

残された首だけで足掻いた。

舌を、琴の舌に絡ませる。

最初こそ、動きの堅かった琴の舌は、徐々に活発になり、琴の甘ったるい声が漏れ始めた。

少し口を離すと、舌足らずに「おにーちゃん」と呼んでくる。

「もっと……。もっとしたいよ……。もっと……。はぁぁ……。おにーちゃん……。はぁ」

自ら舌をいれようと、唇の端を舐めてくる。息を切らしながら、子犬のように舐めてくる。

はぁ……。

「琴……」

自由になった体で、琴をゆっくりと倒した。

口の中の寂しさが、消えてゆく。

午後12時。

昨日作っておいた肉じゃがを食べた。

ダシが染みっていて美味しかった。特にジャガイモ。

琴も黙々と、そしてニコニコ食べていた。その顔を見る度に、作ってよかったなって思える。

琴はナス以外なら何でも口にする。

だから作る俺も助かる。

「まあね。せつかく作ってくれたもんだからね。他にできること無いから」

琴が申し訳なさそうに言った。

「食ったあと、皿洗いしてくりゃ助かるけどな」

琴は耳を押さえて「聞こえませんが」のポーズを見せた。

「はあー。今日は良い天気だ」

外を見る。ざー。雨だろう。

「じゃー、皿持ってきてくれるだけ持ってこい」

「……はあい」

俺は自分が使った皿を両手で持って、キッチンに行く。その直ぐ後ろから、足音が付いてくる。

琴を見ると、二枚の皿を重ねて、片手で持っていた。

「無理せず両手で持てよ」

「お兄ちゃんと手を繋ぐために空けてるの」

にひひと笑う。

いやいや、これはさすがに」「あほか」。

そんなことしてて、皿割られたらシャレにならない。

「両手！」

「……はい」

琴は皿を両手で持った。

午後3時。

志太の話。

「俺の友達がクッキー作るって言ってたから、昨日遊びにいったんだ。最初はまあ普通に生地作ってたんだけど、でもオーブン170度にしなきゃいけないのに、レンジの500で焼いててね、丸焦げ

になつたんだよ。それでね、なんでそんなことしたんだよ？ て聞いたら、『いやあ。電子レンジにオーブンなんて、あるんだねえ』てなんか感心してるんだよ。アホすぎやろ？」

ぶ。

「でもね。その黒こげクッキー、他の友達が『うまい、うまい。はあ、うまい。ごほつ。うおっほん』言つててね、黒こげを美味しうに頬張り始めて。さすがにその時は、そいつが本当に人間なのか？ て疑つたよ」

「つつか、よく食つ気になつたなあ。そいつ」

「ココアクッキーって言つといたから、黒いのなんて、当たり前だ！ て言つたら引つかかったよ。匂いで気づかないソイツが神に見えるたね、うん」

「ははつ。そいつ会つてみてえわ」

「ダメダメ。そいつ琴に嫌われてるから」

「あ？ そうなの？」

そんなの聞いたことねえ。

「そいつは琴のこと、好きらしいけど」

「ああ。そうなんだ」

「うん。でもね、あれだよ。好きだからいじめちゃうんだろうね」

「ああ。あー」

その気持ちは、分からないな。

俺は逆に、話せなくなるタチだしな。

ん？ でも琴とは話せるか。あれ？ まあいいか。

「しかし志太。最近俺と話すこと、多くなったよな」

「昔はなんか、湯鷹クンが話したがってなかったみたいだから。最近はねえ、俺に懐いて困ってるよ」

「なっ!」

こいつ、皮剥いでやろうか。

そう思い、俺は志太の頬を引っ張った。おお、柔らかい。くろたんのぷにぷにな柔らかさとは違い、フワフワした感じだ。

言うならばくるたんはハジクけれど、志太は吸い込まれていくよ  
うな柔らかさを持っているのだ。

「やめいよ。俺、餅肌なんだからね」

「いやあ、気持ちいくてね」

トイレから琴が戻ってきた。

「うんこ出たあああああああああああああああああああああ  
ああ」

そういう琴の表情は、天に召される気まんまんだった。

というか最近、トイレ行きすぎだろう、琴よ。

「俺たちって、いつまでウンコとか平気ツラして言えるのかな」に  
こり。

琴が幸せ顔をしてソファーに顔うずめて果てたあと、志太がなに  
を思ったのか言い始めた。

「お前はイヤなの？ そうゆう単語、出されるのが」

「いや、じゃあないよ」にこり。

「ただね、そうゆうこととかを言っても、大人になれるのかなあ……って思ってたね」にこり。

よく分からんが、早く小学生を卒業したいという気持ちは分かった。

意外だと思った。意外にも子供らしいと。しかし、意外だと思えるほど志太のことを知らないことにまた気付いて、志太に何かを期待しようとしていた自分が阿呆に思えた。

こいつは、ひかえめなだけで自分が無いわけではない。

それを、笑顔でごまかしていたのだろう。自分がしたいことを笑顔でごまかしていたのだろう。小太郎みたいにへたに周りが見えすぎていたのを、ごまかしていたのだろう。

だからいつも隙が無く、脇で笑っていたのだろう。

いつも、当たり前障り無く。

人の気持ちがよく分からん俺にしては、やけにピースが上手くはまっつていった。

きつとこいつは、自分が自分を出してもいいやつを探してて、それを俺にしたのだろう。

俺の目をえぐるように見つめてくる。観察している。自分すら信じる事ができないから。

俺にぶつけるつもりなんだろう。

ならば、出来る限りのことはしよう。

「ウンコッロー」

玄関からリビングへ入ってすぐに、そんなことを言う星葉。

ああ、こんなやつ好きになったら苦労しそうだ。

志太は例の微笑みを浮かべている。

それを見て、俺と似ていると思ってしまったのは何故なのか。

もきゅもきゅ。

4月2日。

午前11時。いつもより暑い。

「お兄ちゃん。今日のあたしはなんか、汗が吹き出てるから、あたしがパジャマ脱ぐから、汗拭いてー」

俺の太ももにダイブしたそいつが、小さいカラダをうつ伏せにしたまま、そう言ってきた。

「自分でしなさい」

「けちー」

俺は琴に頭を下げさせて、琴の耳元で言う。

「俺じゃ、汗だくにしちゃうだろ……逆に」

そう言って、耳の穴に舌を入れた。

琴は顔に、恥じらいが浮かばせるとすぐにカーペットに視線を向けようとしたが、俺はそれをさせずに震える首を掴み、右耳朶に鼻を軽くつけながら（……はぁ）、囁いた。

「行け……」

「……わ、わか、りました」

琴は、へなへたと立ち上がった。

……たくつ。

\*

「でも今日は本当に暑かったんだよ」

「そうかい」

琴は顔からジヨバジヨバと水を垂らしながらオオオオオオオイ。

頭を叩いた。「ふぎっ！」琴の顔から水が散る。

「顔拭けよ」

「焦りゆえの過ちです」

額から汗が流れる。そうか、確かに暑い。

コタツから出た。そうか。

「コイツをそろそろ、片付ける時期かい」

「あー。今年は結構粘ったねえ」

お腹のどこから聞こえる琴の声。じじじじ。

頭バシッ。「きよはん!」俺で拭くなっつもの。

「冷静すぎたゆえの過ちです」

訳わかんねえよ。

「とりあえず、コタツ片付けるぞ」

「はい」

今まで家事させてなかったからな、たまには手伝わせよう。

「コタツの上の、ポンカンの入った皿をキッチンの机の上に置き、コタツをひっくり返した。」

「ちやぶ台返しっ！」

うるせえよ。

「琴、そっちの脚外して」

「しっ！」

「ことん、ことんと2つ外した。」

「俺も2つ外した。」

「それで、布団を剥がすから、そっち持って」

「うい」

それで、俺は琴が持っていた部分を持った。

「ねー、お兄ちゃん」

「んー？」

「脚外すんじゃないくて、テーブルを外せば手間数少なかったんじゃない？」

「……あ」

琴が口を指の腹で抑えながら、クスリと笑う。

「お兄ちゃん……まっぬけ」

……うるせえよ。

俺は洗面所にコタツ布団を持っていった。

\*

「ついでに掃除もしく。琴、寝っ転がってないで手伝え」

「えー」

琴は先ほどまで、ずつとコタツがあった場所に仰向けで大の字に寝ている。

時計を見る。 12時か。

「掃除し終えたら、昼食だ」

くう。 琴のお腹から、チワワみたいな音がした。

「なにすりゃええの〜?」

外からの太陽の光が、俺の髪を暖めていく。

窓が少し、白く濁っていた。

「窓拭きしてくれ。 布巾はテレビ台の奴な」と言って、指を指した。

「へーい」

琴がそこに向かう。俺の手には掃除機だ。

『がああああああああああ』

掃除機の音がうるさい。

なんか、もつと静かな奴でも買いに行きたい。が、壊れてもないものを買換えるのは少しもつたいない気がした為、このムダな考えを排除することにした。

記憶クンは刀を持った。

そして、ムダな考えに一の太刀をくらわせる。

ムダな考えは、悲鳴のような血しぶきをあげながら、かくかくと躰を震わせたのち、ジエンガのように崩れ落ちた。よし。

『バアアアアンツッ！』

「ひよえー！」

なにごとだ？

琴を見る。カエルのようにひっくり返っていた。んなアホな。どれだけリアクション上手なんだ、妹よ。

次に、琴の目の前にあつた窓を見る。

豚がいた。鼻は潰れ、目も潰れ。不細工なこと、この上ない。

「なにをやってんだ、ホシ豚」

その豚は星葉であつた。窓から顔をはがすと、潰れていた目は途端に大きくなり、潰れていた唇は気色の良いピンクになり、結構な美少女になった。ピンク髪がキラツ　と光った。ああウザイ。

俺は掃除機の電源を切った。

窓を開けると、星葉は頭の後ろに手を回し、「てっへへへ」と照れた。ああ、ぶん殴ろうかなあ。

「いやね、珍しく琴が窓なんか拭いてるのを見ちゃってね　なん  
か本でも見てたのか、こっちにも気付いてなくて　　つい　　」

「つい　　じゃねえ……てのっ!」

ひゅん　　おらぁ!　　紙一重え!

しかし、なんか見てた、という発言は気になるな。

琴を見る。片手にNANA21巻を持っていた。油断したな、琴  
よ。涙を浮かべていた。

「あ。ついでに星葉、お前も掃除してけ」

「えー」

「メシと和菓子くらいは用意してやっから」

「おお　　それは楽しみさ　　」

俺は、台拭きを星葉に命じた。

「頼むよ」

「まかせるさ」

星葉はがめつい奴なので、ご褒美さえ（和菓子のこと。とくに桜餅とお萩が大好き）用意すれば、なかなか頼もしいのだ。

さて、と。

『があああああああああ』

俺は掃除機で、琴のお尻を突いた。つんつんと。

は、や、く。しろ。

『があああああああああ』

つんつん。

「はい」

カエルは立ち上がった。

「でもね、お兄ちゃん……。掃除どころ、ちやいまんねん……。レ  
ンが死んどんねん！」

「俺は電子レンジ壊れる方が悲しいわ」

「鬼か!!」

「はー めっぢ言いませ」

午後3時。

星葉が桜餅をぐにぐにと食べながら、『星座』をして緑茶を呑む。  
見た目がファンタスティックなため、なんだかシユールな絵になっ  
てしまう。

「あれ？ あたしの桜餅は？」



最近、身長差もついて、だいぶ力の差もついたというのに、懲りない奴だわ。

珍獣ショップに売ろうかな。

そう思いながら星葉を見ると、琴も一緒になって倒れていた。

「めがまらる〜」

……まらるる？

目が回ってしまったらしい。

「二匹でいくらになるかなあ。」

もきゅもきゅ。(後書き)

作者「その前に、珍獣シヨップって実在するのか？」  
湯鷹「あ。あー……たしかに」

リン、知る。

4月3日。

午後8時。

「宿題終わったー！」

琴は立ち上がり、ソファーにダイブした。

そして、ソファーに座っていたリンの股間に、顔をうずめる。小太郎がいたらナニかしら反応しそうな構図である。

105

「つかりたー」

「よーしよし」

リンは琴の背中を軽く撫でる。リンは今日、泊まりらしい。

志太も泊まるらしい。ソファーに寄りかかる俺の右隣で寝転びながらテトリスDSをしている。対戦相手は俺だ。強いな。

くろたんは更にその右隣で、俺が書いた童話小説を、俺と同じ体制で見ている。

作品は、出版された作品は筆者のもとに届けられる。それらは丁寧に、俺の部屋の本棚に収められているのだ。

「じゃ」

「あ？」

琴が対戦中に話しかけてきた。タイム。

「どした」

「宿題終わったんだから、一言くらいなんかどうだ言ってやれよあたしに！」

俺は、冬休みのおきのように「宿題終わりませんでした」という定番のオチを避けるため、今のうちにやるように言った、というかやらせたのだ。

どうやってやらせたかというと、宿題終わるまでサイフを没収し、毎日ドリル（合計28ページ）を1日3ページ終わらせるまでお菓子とゴハンとゲーム没収したら、わりかし簡単に終わらせてくれた。

「簡単じゃないやい。リンちゃんいなかったら死んでたやい。ちつたあ誉めるよー」

「やだよ」だって当たり前の事だろ。

「はうあああ！」

背景効果音、がびーん！

「お兄ちゃんの鬼！ お兄ちゃんなんかもお、鬼 おに いちゃんだ！」

え？ うん、お兄ちゃんだが。

琴がいじけてリンの股間に頭をぐりぐり押し付ける。

「うえあああ！ 琴、ちゃん、ちょっと落ち着けイ！」

リンがものすごく焦っている。はあはあ言っている。

「そろそろ続き、しよ？」にこり。

「んー？ うん」

タイムを解いた。

「ちよっ、せんぱあ！ 助けて！」

『ぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐりぐり』

「ひあいいいいい……」

ああ、テトリス面白い。

「黒民先、たすけ……っ」

その黒民先輩は、俺の本に夢中だ。ナイス、集中力。ん？

くろたんは泣いている。ホロリほろりと。まじか。

俺は人の心を動かしたのか。

(リンが琴に言いたいことがあるため、リン視点に移ります)

あー。もお11時か。

ここは琴ちゃんの部屋だ。

あたしの隣りには今、琴ちゃんがいます。

innベッド。先輩に前回の泊まり会のお泊まり会の次の日に怒られたので、今回はちょっと反省して早めにベッドinnしました。

さて。

今からちよつと怒ります。

「ねえ、琴ちゃん」

「なあにー？」

真っ暗ななか、ベッドの横に置かれた子棚の上のデジタル時計の文字の光に照らされて、かすかに見える程度なのに、それでも楽しそうな顔をしている。

可愛いー。もお、欲しいなこの子っ。

「じゃなかった！」

「へ？ なにが？」

「あ。あはは、気にしないで琴ちゃん

「んふふー。うん

「こほっ、んん

気持ちを和ませるために、咳払いをした。ふう。

「あのね、琴ちゃん

「うん

「あんまり今日みたいなこと、てゆうか二度としちゃヤダからね

「頭ぐりぐり？」

「そう！ それ

「ふふ、分かったー

ニコリとしたと、思う。

うう。琴ちゃん分かってるけど、コレは。もお。

「でも、お兄ちゃんも誉めてくれるぐらい、いいよね

お？ 拗ねた声。

「あはは。照れくさいんじゃない？」

「んーん。お兄ちゃんって、なんかムダにクールだから」

「あー、分かるなソレ。でも基本的には優しいよね」

「まあ。ねえ」

ちよつと声が微妙な感じになった。んー、なんて言えばいいんだろ。なんか可愛い感じ。ツンデレ？ …… よく分かんないなあ。

「優しくないよ、琴ちゃんを一人で育てるなんて、出来なかったと思っよ」

「……うん。感謝してる。だから好きなんだもん」

おお！

「ふふん、今の聞いたら先輩泣くね」

「え！ ええっ！ 言わないでよ！」

「まったまたあ。本当はいつも言ってるんじゃない？」

琴ちゃんにデコピンした。

「ええっ！ 言ってないよ！ 嘘じゃないからね！」

うわー、言ってるさうだなあ。

動揺しすぎだよ、もお。可愛いな。

「あはは、分かった分かった」

「もお。………言ってくるのお兄ちゃんだからね！」  
「うっそお」

あの先輩が？

「ホントだよ！ 抱きしめてきたり、キスしたりもするんだからね！」

急に。

頭が冷えるような、熱く煮えるような、そんな感覚に襲われる。

あの先輩が？

嘘かとも思う。いや、嘘に決まってる。実際嘘みたいな話、いや、兄弟なら軽いキスくらいするのか？ いや、しないよね。するのかな。

「ど、ここにキスされたの？」

「え？ おでことか、耳たぶ」

リツアアアアル。

なんかリアル。すっげーすっげーリアルじゃないかねオイオイオイ。  
イ。

耳たぶってところが先輩くさい気がしないでもないな。おお……。  
いや、普通のことかも。ん？ 普通ってなんだろ。んんんんんんんん。

「リンちゃん？」

「へ？」

「どうしたの？」

「いや、なにもありません」

そのあと。ウチは話はここで終わりにしよう、みたいなことを言  
って、琴ちゃんが寝息をたてるまで、琴ちゃんのお腹に手を置いて



『、、、、、、、、、、、、、、、、、』

心臓の音……。

『、、、、、、、、、、、、、、、、、』

うるさい。うるさいよ。目を開ける。

琴ちゃんの口が微かに動いているのが分かった。

「、、、、、、、、、、、、、、、、、」

犯人は、お前か!!

リンの、問い。

甘い匂いがする。

チョコレート匂い……？

目を開けると、くろたんの愛くるしい寝顔があった。唇は半開きで、まっげは女の子のように長い。俺は今、ベッドの中だ。

ああ、そうか。泊まりか。

くろたんの首を嗅いでみる。うわ。

うわー、チョコレートの匂いがする。なんで？

背後から寝息が聞こえる。振り向く。志太だ。寝顔も微笑んでいる。俺の顔とほとんど距離がないところで。

その上、俺のカラダに抱きついて寝ている。ふわふわ柔らかい。ネコのようだ。

金髪からサワーミンツの香りがする。もお、こいつらジャーニーズ事務所に届け出だしてもいいな。それか性転換してくれ。我が家は安泰だ。

ケータイを見る。4月4日。午前7時。いつもより二時間も早く起きてしまった。

しかし、なんで誰かが一緒にいると、起きるのが早くなるのだろうか。

俺は部屋から出た。

階段、きしりきしりと少し軋む。朝、琴以外に誰かがいると、気を遣わないといけないから面倒だ。

洗面所に行き、洗面台に水を溜める。ぱしゃぱしゃ適当に顔を濡らし、洗顔料を泡立てて顔に付ける。

そのまま顔を洗面台に勢いよく突っ込む。「おらあああああああ  
あ！」

水しぶきが上がり、スウェットの襟が濡れた。

スッキリだ。目が覚めた。

朝の風が寒いため、前かがみになって歩く。まじでジジイになりそうだ。

朝食は何にしようか。チョコレート・トーストにしようか。

そんなことを考えながらキッチンに繋がるドアを開けると、そこにはリンがいた。

引きドアなので、リンに気付かなかった。距離はキスする手前。

リン、顔面凶器。甘美な意味合いで。

顔が熱くなるのを感じながら、後ろへ一歩下がって、背筋を伸ばしてから「おはよ」と言った。ちゃんと笑えているだろうか。

リンの顔が赤くなる。

「今日は早いな、起きるの」

「あは、はははは……」

右手でうなじを掻きながら、笑うリン。あれ？ 目の下にクマが  
いる。それを見ていることに気付いたらしい。

「ちょっと寝付けなかったんすよ」

「琴がなんかしたのか？」

「いやいや、琴ちゃんには別になにもされてませんよ。あはは」

「琴ちゃんには？」

「星葉が来たのか？」

「へ？ なんで？」

「あれ？」

「違うのか。」

「先輩の、せいですよ」

視線を一度沈めたあと、リンは硬い表情でこちらを見直す。硬い表情だ。

「俺？」

「はい」

「なにかしたか？」

「先輩が夢の中で盛りにサカリ、私の」

「俺関係ないだろ！」

「あははっ」

デコピンをした。「いたっ」柔らかく崩れた。

「朝飯、コーンフレークとイチゴジャムにプレーンヨーグルトでいい？」

「いっすよー」

「じゃありビングで待ってな」

「らじゃーっす」

ニカアツと歯を見せて笑い、警官とか軍人のように指をおでこに付け、リンはリビングに消えた。

二分くらい経って、俺は朝食を二人分、リビングの机の上に置いた。

「先輩、イチゴジャム好きなんすね」

「んー？ 嫌いだったか？ 他のが良いならオレンジジャムと梨ジャムと枇杷 びわ ジャムとかもあるけど」

「どんだけあるんすか！」

「いやな、キジから差し入れきてさ」

「あ……ああ。ジャムマンでしたねそつえば」

「春休み前に急にきて、ジャムだけ置いて『あばよ！』だもん。あいつも相当訳わからんヤツよ」

「あははっ」

リンが、スプーンを持つ手を止めた。

「先輩って、結構しっかりしてますね」

「えっ。急にどうした？」

リンが、『尊敬してます目からビィィイム』を出し始めたので、  
ビビった。

「だって、琴ちゃんをあそこまで育てたんですもん。しっかりして  
ますよ」

「そうかねえ……」

「そうですよ。ウチのお兄ちゃんなんて21歳なのに、まだお母さ  
んから朝、起こして貰ってますから」

「プー太郎さんかよ」

「あははっ」

俺がすっかりしてんのは、お前が俺に料理とか、洗濯とか、色々  
教えてくれたからなんだよ。覚えてないのか？

「そろそろ食べよ。べっちゃんべちゃんになるぜ？」

コーンフレークを指差した。

「おお、そうすね」

カチャカチャとスプーンが音をたてる。

甘ったるいいちゴジヤムは、酸味のあるプレーンによく馴染む。

コーンフレークは殆ど無くなり、牛乳を残すのみとなった。

ヨーグルトも食べ終え、牛乳を飲みほす。

ケータイを開く。午前7時半。話していたからか、時間がおお、  
そんなにも過ぎていた。

爽やかなファーストブレイクでも、時間を掛ければ腹も膨れるら  
しい。

「ふうー、ごちそうさまだった」

「ん、ああ。ごちそうさま」

食器を全部お盆に乗せる。

「ありがとうございます」

座ったまま、リンは頭を下げる。

「いって、そうゆうの」

俺はキッチンに行った。

洗い場。泡の付く手は冷たい。でも、なぜか嫌いにはなれない冷たさだ。

今は暖かいとさえ、感じる。

リビングに戻ると、リンの大きな目は、半分しか開いていなかった。

「眠いのか？ リン」

「はー、はい。なんか、先輩と話していると、気が安らいじゃってえ……」

「ははっ。そりゃ良かった。よっ」

「うわ」

俺はリンを持ち上げ、そのまま、ソファーに横にした。

「先輩、びっくりしました……」

「そうか？ わりいな」

「いえ……」

ちょっと顔が赤い。風邪気味か？

「ちょっと待ってる」

俺は自分の部屋の押し入れから布団を持ってきて、リンのカラーダに被せた。

「俺のだから、ちょっと男くせえかもしんないけど、ガマンしろよ？」

俺がそう言うと、リンは顔を布団に隠した。

「……イカくさあい」

「してねえっつの!」

目から上だけを覗かせるリン。

「襲いたくないですか?」

「布団剥ぐぞ……。寝るなら、さっさと寝ろ」

「あははっ。そうすっよね。先輩はそう言う人なんっすよね。……するわけない」

手招きするリン。なんだよ。そう思いながら近付くと、リンの口から今は有り得ないはずの言葉が漏れ、俺の耳はそれを拾いあげる。

耳を疑った。

なんでだ。もお、違うんじゃないかったのか。ああ……。

俺は、良い大人なのに。自分の幼稚さに腹が立つ。

『先輩が好きです。……私じゃダメですか？』

リンの口から漏れた言葉だ。

俺は頭を掻いた。

もう一度見ると、そいつは寝息をたてていた。今のは寝言か？

そうだとっても。

「あ。おはよう、お兄ちゃん」

「ん……」

俺も寝てしまっていたらしい。

午後1時。はやっ。

「おはよ  
」

星葉、来たのか。

ソファアーに寄りかかって寝ていた俺は、立ち上がってキッチンで水を飲んだ。

リビングに戻る。

俺を見て、くろたんが丸くなって堪えるように震えた。

「どうしたんだ？」

くろたんがシエル状態から、そおっと俺の顔を見て、吹いた。おい。

「星葉  
」

「なに  
」

顔がにやけてやがる。

もう一度ケータイを見ると、おおっ、こんなに髭だるまだったかねえ俺は。落書きだよオイ。

「志太」

ぼたぼた焼きを食べている志太を呼ぶ。

「ん？」にこり。

「これやったの誰？」

「言っちゃダメさ」

「へえ。お前ね」

「しまったさ」

「馬鹿だなあ、ホシ」にこり。

血湧く、血湧く。

「ゴキゴキゴキゴキゴキゴキゴキゴキゴキ。」

「にゃあああああああああああああああああああ

」

死亡。

「んん……」

ソファーに寝ているリンが起きた。

「おはよ」

「んん……おは誰!？」

ひびえ。

午後7時。

「そろそろウチも帰りますね」

「ああ」

「またねー、リンちゃん」

リンは琴の頭を撫でたあと、玄関へ向かった。

俺はそれを追う。

「リン」

「はい？」

笑顔でこちらを向く。

「俺さ、お前とは友達でいたいんだよ」

「……はい」

リンは俺の目を見ていた。俺の目をしっかりと。そして笑った。夕焼け空のような寂しい笑顔。

「はい、分かっていますよ」

玄関ドアを、リンは開けた。

「またな」

「あははっ。はい」

ドアは閉まった。

「ごめんな……」。

フットしたのは、俺なのに。

涙が口に流れ込む。

\*

「お兄ちゃん？」

涙がおさまるのを待っていたら、いつの間にか琴がいた。

「どうした？」

「いや、いつまで経っても戻ってこないから」

時計、7時20分。まじか。

リビングに戻る途中、ケータイが震えた。

メールだ。リンから。

開く。

「コトちゃんにキスしたのって…女の子として好きだからですか？」

生まれて初めて、冷や汗を流した気がした。

そうか。琴に聞いたのか。

ああ。そうか。そうか。そうか。そうか。そうか。そうか。

『……私じゃダメですか？』

そうか。

ああ、琴に口止めしておけば良かった。

そしたら俺は、気付かなくて済んだんだ。いろんなことに。

そんなことばかり思いつくんだな、俺。

下を向くと琴の背中が服の隙間から見え、愛しく思ったが、なに  
もできなかった。

リン視点

午後9時。

自分の部屋。

ベッドの上に一人。ウチ一人。

琴ちゃんがキスされたってこと聞いたあと、先輩に本当か訊こうかと考えていたら、切なくなった。

その切なさは、まだ先輩を諦められないことからだと、先輩に朝会って気付いて。どうしようもなくて。告白しようと思って。

でも今更どうすればいいか分からなくて。だから眠気に乗せた。今思えばバカだ。全部わけが分からないままの行動だ。

でも、あんないい加減な告白を、先輩は真面目に答えてくれた。

嬉しかった。でも悲しかった。

ふられたんだ。

だからイジワルな質問をしてしまったのかもしれない。

取り消したかった。

「なんで、はあっ、あんな、うっ、メール、送っちゃうかなあああ  
……」

胸の中が、ぐちゃぐちゃになる。

ばあああん！ ドアが開いた。

びくっ！

「リンー！ 風呂、空いたぞー！」

そこには、大事な部分をタオルで隠した湯気オーラむんむん、筋肉むきむきの兄がいたぎあああああああ。

「出てけっつーか、空気読めえ！！」

蹴り。オトコの大事な部分を。

「ぬあああああああああああ」

タオルが外れた。

ぎあああああああああああ。

そこに君がいる奇跡。

4月5日。

昨晚、俺は一人で風呂に入った。

昨夜、俺は眠れなかった。

リンに気付かされ、俺は琴にキスとか、抱きしめたりとか、そうゆう類のことはしないと決めた。

俺は誰にも甘える必要は無い。これ以上、琴の人生は狂わせられない。

頭の隅にあった、小太郎の言葉を思い出した。

『好きなら犯せ。大切ならシカトしな』

シカトは出来ない、見守るくらいは許してほしい。誰に、とは言わないが。

ただ。向こうがそうゆうことをしてきたとき、俺が、ちゃんと対処できるかが心配だった。

俺の本心が、

\*

午前6時。

俺は本当にジジイになるのではないかと心配した。6時で、あんな。

とりあえず洗面所で例のごとく、うんどりゃあああああああ！  
しゃっばだばでい〜して、誰もいないであろうキッチンへのドア  
を開ける。

くろたんがいた。距離はキスする手前。

顔面凶器。禁断の果実的な意味合いで。

てゆうーか何故いる。

「あ、え、えと」

顔、赤くするなよ。へたしたらリン以上に可愛い顔の作りしてんだから。

「か、えり、忘れて」

訳すると、帰るのを忘れてしまっていたらしい。

まあ、くるたんは忘れん坊だからしょうがないよね。

『ガンッ』『きょん！』

くるたんに拳骨をくらわした。涙目だが、今回もそれで許すほど人間ができている覚えは無い。全く無い。

レベル的には星葉と変わらんだろうよ、コレ。

「てゆうか、今までどこにいたんだよ」

「どこかなあ」

お前はスター・ウォーズ劇場の梅宮クラウディアか。

とりあえず、朝飯作ってやるか……。

「朝飯コーンフレークでいい？」

「あ、うん。え？ いいの？」

いつもは可愛い、このオドオド感も、さすがに今はイライラする。  
朝6時なのでね。全然爽やかな朝じゃねえ。

「リビング行ってな」

プレーンヨーグルトにリンゴジャムを入れ、コーンフレークには  
コーヒーミルクを注ぐ。さすがに全く同じは飽きるから、多少昨日  
と変える。

はあ、なにこれ。デジャブかい？

はあ、なんか、まあ、いいや。イライラ捨てよう。

リビングのドアをゆっくり開ける。

「はい」

ゆっくり置く。

「あ、ありがとう」

プレーンを食べるくるたん。

口が、梅干しを食べたときのようになった。んん？　なんで？？

もしかして、そう思いながら、訊いてみる。

「プレーン、苦手……つうか酸っぱかった？」

「ん……んーん」

じゃあナゼやねん。

「ロンと口からなにか、丸いものを吐き出すくらたん。こ、これはあああああ。」

梅干しの種である。うわーお。シユールう。

「いや、なんでだよ!!」

「ええ、ええええ。わか、んない」

オドオドオドオド。オドオドオドオド。俺がオドオドオドオドしたたっての。

「湯鷹が、ヨーグルトに入れたんじゃ、ないの?」

「そこまで冒険心溢れてねーよ」

言った瞬間、琴の顔が浮かぶ。ああ、充分に冒険心あったわ。

検証してみる。



するとプレーンヨーグルトから蒸気が出始めて、くるたんが「すっひゃい」と言ったあと、梅干しの種に様変わりしたあと、その梅干しの種が銃弾のように俺の顔の横を突っ切ったあと、衝撃で俺の頬がぶち切れて血のシャワー。

きゃあ。ぷしゅー。きゃあ。

星葉に慣れてなければ失神が失禁していたであろう。

「くるたん」ぷしゅー。

「血しぶきー！」

お前が原因ね。

俺は、ぶらっどジュースを飲んだ。体力マックスだ。

\*

更に検証。

プレーンヨーグルトだけ。

「酸っぱい  
いいいいいいいい話」

けれど、なにもなし。

リンゴジャムだけ。

「甘ああああああい！」

スピードワゴン。

プレーンヨーグルト(略)。

「酸っぱい」

「梅干しの種、飛距離、俺の眉間にめり込み測定不能。」



「そ、そんなこと言われても！」

午前11時。

「おはよー」

「し。  
琴が起きてきた。珍しいことに、言われる前から洗顔してきたら

「お、おはよ」

くるたんが言う。

「あれ？ なんでくるたん？」

俺が事情説明をかくかくしかじかと言い、琴はかくかくうまままと言っ。

「全然意味分からんよ、お兄ちゃん」

だろうな。俺も意味分からん。

「まあ、でもいつかあ」

ニコニコとくるたんに近付く琴。

「触らしてー」

「うあー」

ああ、なんか、懐かしい光景だ。

くるたんの頬が、びよーんと伸びた。

星葉ちゃん、サクセスストーリー

4月6日。

「あー、暇だねえ、お兄ちゃん」

「そーねー」

「先輩って仕事無いんですかあ？」

「無いねー」

「リンちゃんって就職とかしないのー？」

「あー、いや。心理カウンセラー目指してるから、大学行ってくるよー。で、そのあとは大学院ねー。で、検定試験ねー」

「へー。なんかすごいねー」

「あははっ。ありがとー琴ちゃん」

「リンって、頭いいよな」

「あははっ。いいつすよー」

「自分で言つなよ」ぱちん。

「あー、先輩のデコピン痛いつすよお」

「手加減したんだから許せえ」

「許すよ、お兄ちゃん」

「お前がかよお」ぱちん。

「きゃー痛い」

「あははっ」

リンが笑った。

午後5時。なんというか久しぶりにダラダラした気分だ。

リンが落ち込んでいるもんだと思っていたから、いつも以上にダラダラな姿を見て安心というか拍子抜けした。

まあ拍子抜けっていうのは良いことだろう。気を張らずに済むし。

くろたんと志太と星葉は机で向かい合ってテトリスDSをやっている。ハマってんなあ。

くろたん負けてんなあ。

意外なことに、志太も負けている。

つまりは星葉が勝ってるわけだが、星葉に降ってくるパーツは棒のみ。

プロアクション・リプレイ（改造パーツのこと）を使っているわけでは無いらしい。

「ミラクルスター イリユージョニスト星葉」

察するに星葉、ゲームに対しても違法な業を使えるらしい。もはや存在自体がアウトである。

それでも大健闘の志太。くろたんは即死なのに、志太はくらいついてくる。さすが能力的にパーフェクトなだけはある。

ボタンを押す指が見えない。シュシュシュシュシュシュシュと、謎の音だけが響き渡る。恐ろしい。これでも負けているということも恐ろしい。だというのに。

「ニコニコニコニコニコニコニコニコニコ」にこり。

セリフすらも笑っているのが恐ろしい。完全究極ニコニコだ。

「ふはは

」

対して星葉の星も史上最多である。評価欄のコメント感謝劇場すらも凌駕する星の量だ。

そして星葉のDSがぶっ壊れた。

「うわーお」

星葉の星がボロボロとDSに降り注いだのだ。しかもそのとき、皮肉にも志太には勝っていた。いや、魔法のせいで皮肉にも思えないが。

「おーいおいおいおい

おーいおいおいおい

」

不自然すぎる泣き声が響き渡る。

志太が星葉の肩に手をかける。

「勝負に勝ったのは、お前だよ」にこり。

「おーいおいおい志太っちおーい」

「ニコニコ」にっこり。

志太よ……。嫌みなのか、慰めなのか。

「よし 花見行こうさ」

ここまで噛み合わない会話は、初めて見たんだぜ

星葉が俺をじいつと見る。

「弁当、用意ねえつつの」それ以前に急すぎるが。

「」

「」内に何も無いって、斬新すぎて避けれなかったぜ 鼻にぶしゅー。

「血しぶきー！」

また言う、くるたん。血しぶき好きなのか？

「うん　大好き　」

お前は黙れ。リアルに怖い。

「まあ、明日なら……。行くなら明日な？　今日はまあ、遅いし」

「おおー。花見なんて久しぶりっすねー」

「桜かあー、星葉もたまには良いこと言うねー」

「あはん」

さくり。ぶしゅー。

「……行かせねえぞ？」

「血しぶきー！」　くるたん。

琴の眉間に星が刺さった（俺じゃないとは珍しい）。琴は頬まで突き刺さるような、鋭い猟奇的な笑みを浮かべた。

目、キラッ。

そして星葉に（省略）星葉は死んだ。ぶしゅああああああ。

「星葉あああああああ」にこり。

叫ぶわりには微笑み紳士。

あ、そうだ。

「リン。明日弁当作ってきてくんね？俺も俺で作るから」

「ああー。ういっす。腕によりかけてくるっすよ」

「ありがとう」

みんなノリがいいな。

くろたんと志太は行けるかな？

まずはくろたん。

「桜、かあ」

目、キラキラ。

志太。

「」に「」。

いや喋れよ。

全員行くってことでオーケーか。よし。

「くろたん、正座」

「へ、な、なんで？」

ちょこん。その上に俺は頭を寝かせた。

「じゃあお休み」

「おお？ 先輩!？」

最近、遅寝早起きで疲れてたんだよ。お休み。

「いいんすか、こんな終わり方！ まだ最低文字数の2000文字越えてませんよ!？ せつかくダラダラダラダラダラダラ話したとゆーのに!！」

「そんなの決まってたんだ」にこり。

くー。

「ああ、もおつ。寝ちゃったよ先輩！ どうしよっ?..!」

「お困りのようさね」

くー。

「あつ。星葉ちゃん生き返ったんだね!」

「再生早すぎだろ、星葉」

くー。死んだら再生しないだろくー。

「残りの何文字か、33分持たせてやるさ」

くー。不声……くー。

【星葉オブどぎゃーん劇場】

ある日のことです。

リンちゃんは山へ熊狩りに、琴さんはコインランドリーで洗濯をしに行きました。あはん

リンちゃんは熊に遭遇しました。

「が、が、がおお」

小熊のようです。くまたんと名付けましょう。まままま

くまたんは涙目です。それもそのはず。リンちゃんは猟銃を持っていたのです。怖くて怖くてしゃあないです。

一方のリンちゃんは生唾をこくり。小熊、くまたんの見た目の愛くるしさにキュン死寸前です。

リンちゃんは猟銃でくまたんの両足を撃ち抜きました。

「はあ……うん！」

倒れるくまたん。

「今夜のおかず、今夜のおかず！」

リンちゃんはくまたんをお姫様だっこしました。

猟銃は背中にかきました。

もはや反撃するすべの無いリンちゃん。くまたんは大チャンスです。

爪で切り裂く攻撃。リンちゃんの頬に直撃。

しかしリンちゃんは無傷でした。くまたんは昨日、爪切りをしたことを忘れていました。

リンちゃんは涙目で自分の頬をタッチしてきたくまたんの愛くるしさのあまり、キスをしまくります。デーパープです。はあはあ

「うん、ん、ふう、ん！」

くまたんの目がとろけ出します。そんなときです。

「がおー……はあ、めんどくせクマー」

両手に鷹の爪を持った、大きな熊が現れました。

「そいつを返せ猟師！。はあ、んでこんなことをしなきゃあならんのだクマー」

その子を返せと熱心に言う大熊。その目はビククリするほど輝いています。きらりん レボリューション並です。

リンちゃんは震えるくまたんを地べたに置いて、背中の猟銃を構えました。撃ちました。

「あんぼろうおおおう！！」

大熊は大胆に、血反吐を吐きながら倒れました。

大熊の右耳からミカンが、左耳からはDSが物凄い勢いで出てきます。

リンちゃんは思いました。酔コンブなら良かったのに……と。

琴さんはコインランドリーに着きました。

そこには志太っちがいました。



志太つちは死にました。

志太つちの両耳から、ナスがいつぱい出てきます。

「ぎゃあああああああああ」

ナスさんのカーニバルです。

「はっはっはっ。俺を食え！ 麻婆豆腐に混ぜ込むがいい！」

「麻婆カレーにでも良いぞ！！」

「ティルズ・オブ・デステイニー！！！」

「はっはっはっ」

「はっはっはっ」

「はっはっはっ」

「はっはっはっ」

ナスさん達は、琴さんの方へ行進します。



ずっと元気に振る舞うさ

キミのための星葉ちゃん

バウムクーヘン引きちぎる

引きちぎって

アナタに食べさせる

(ばみゃーん)

アナタの愛が欲しいから

少しでも輝きたくて星を巻くさ

アナタのそばにいたために

ずっと元気に振る舞うよ

キミのための星葉ちゃん

バウムクーヘン引きちぎる

引きちぎって

アナタに食べさせる

(ばみゃーん)

「いつかきつと、私の虜にしてやるわ」

(ばみゃーん)

桜は綺麗なのは、傳いから。

4月7日。

午後11時半。

今日は昨日、さんざん眠っていたからか、まったく眠気に襲われる気はしなかったのだ。

\*

午前11時半。

俺は花見の弁当を作っていた。

手間かけるのは面倒だから、簡単なもので。

オクラをハムで巻いて爪楊枝で刺す。あとキュウリバージョン、シメジバージョン、ピーマンとニンジンバージョンも作る。

ジャガイモの煮っ転がし、そろそろか。

「お兄ちゃん、こんなでいい？」

驚くことに。

琴がツナマヨ、イチゴ生クリーム、ポテト、チーズトマト、ハムとレタス、そんなレパートリーのサンドイッチを次々と作りあげる。

琴は、サンドイッチやオニギリなど、簡単なものなら作れるのだ。驚くのは、自らすすんで手伝いをしてくれているということにだ。

パスタが茹で上がったらしく、電子レンジがピーツと音がする。

茹で上がったそれを弁当サイズに切り、明太子の卵巣を剥いで中の卵を麺と絡ませる。まあこんなもんか。ノリを振りかけた。

油を大分吸われた揚げたての唐揚げを、下にレタスに敷いて弁当に入れる。

オーブンの中のウインナーを琴に取り出させて、好きなように切らせた。タコさんウインナーとかカニさんウインナーとかが出来上がることだろう。

そこでジャーマンポテトを入れて弁当完成。

リンも作ってくるし、全員分は余裕だろう。

「どうだい、お兄ちゃん！ あたしだってやればできるでしょーが  
」！

腕を組んで、得意気にウインクする小生意気な妹は相も変わらず  
愛くるしく、俺は思わず頭を撫でていた。

しまった。一瞬そう思う。しかし。これぐらいなら……. . . . .  
と思って  
暖かい頭を撫でた。

微笑む琴を見て、俺はしっかりしようと再び誓った。

午後12時。

しばらくしてみんなが来た。

弁当とケータイとDSとサイフ、全部入れたな、うん。

玄関に志太、くるたん、リン、星葉、琴。よし。

リンはバイクだよな。弁当持とつか。

「大丈夫っすよー」

そうかい。

軽車の前にくるたんをのせ、後ろに小学生組をのせた。やっぱり、一人だけバイクってのはアレなので、リンも乗せた。そのうえに琴が乗った。

「はー　楽しみさー」

星葉ー。頼むから車のなかでは飛ばすなよ頼むからー。

一番小さい星葉は今、130センチくらいだったか。真ん中にちよこんと座って足をバタバタさせている。

「相変わらずコーヒーくせー車さー」

横で160センチくらいだったか、それくらいある志太が星葉を笑いながら見ていた。

志太って身長高いな、よくよく考えると。これで、今年六年生か。ハーフ凄いな。

車んなかで、くろたんから借りた大塚愛のエムディーを流す。

さくらんぼが流れ出した。ベタだなあ。でもコレが一番良いよな。分かりやすいし。

くろたんが琴が歌い出した。くろたんがいつもよりはしゃいでて和んだ。

「あーたしさくらんぼー」

くろたんは相変わらず違和感ゼロ。声がアホみたいに高い。そして上手い。琴も普通に上手い。

星葉も歌い出した。おんち。

「あはん、ぎょー！」

星葉ウインクを志太が両目を塞いで防いだ。やばっ、頼りになるわ。

リンは普通。さすがはノーマルが取り柄だけはある。

「うおい。ひどくないっすか、うおい！」

ははっ。

「志太っちも歌おっさ」

星葉が志太の肩に指先でちょこんと触れながら言う。お、おお…

…。星葉、さりげなく頑張ってるな。顔ちょっと赤いぞ。

でも……。そういえば、志太が歌ったことは見たことが無いな。

志太は、次のサビから歌い出した。

「えーがおさくっ、きみとーつなーがーあてたいー」

コオオオオオオオオオオ!

「あつたしさくらんぼっ!」

凄いな……。描写無しで、ここまでへ夕に歌えるとは。

へたすぎて、笑っていいのかためらう。

「……笑えよ」にこり。

悲しいっ…!

横でくるたんが震えていた。片腹痛いっ！ てゆう感じで。

午後1時。

白の絵の具をこぼされた青空に、薄桃色の紙が映える。

春、機械的に美しくなる。桜。

どこまでもどこまでも行こうと、空を舞っては散っていく。桜の花びら。

往生際が悪く、綺麗に這いつくばる花びらを、俺は好んでやまない。

「お兄ちゃん、なに黄昏てるの？」

ん。気にしないでほしい。

「ほあー やばー きれいやー」

星葉が車から飛び出して桜に一方的に話しかけはじめた。あとを追って志太も降りる。

「きれーでんなあ 最近どうぞ」

「桜は喋らないよ、ホシ」にこり。

「夢を持とうぜ 志太っち」

星葉は志太の腰のあたりをパンパン叩き出した。

「すみません」にこり。

お前の存在も、軽く夢みたいな気がするが。

他のみんなも車から降りた。

丸山公園、桜が咲き乱れている。少し時期外れちまってるから、  
もお緑色の奴もあるが。

「はー。なんか……やっぱり桜って良いっすね」

「そうだな」

「心おどるぞ」

お前は心とどめろ。

くろたんの動きが停止している。

お前はとどめでええから。

「あ、へ？」

「はあー 桜 桜」

星葉は志太のウエストポーチから桜餅を取り出して食べ始めた。  
どっから出してんだ。

「桜つまー」

ばくばく。スナック菓子を食べるようなスピードで。

「桜餅ってナニ味？」にこり。

なんつう質問だ。

「コーラ味」

「すごい味覚だね」にこり。

「そつなのさ」

志太の胸に星が刺さる。

ボケまくりの夫婦漫才かよ。

くう。琴の腹チワワ。

昼飯といこうか。

「うーっす」

リンと俺は地面にシートを敷いた。上を向けば桜。時経つと良い場所があるもんだ。

自分で作ったサンドイッチを食べながら旨そうに微笑む琴。

「はー。しっかし……春休み最終日に花見する日がくるとはなあ」

琴が桜を見ながら独り言。

「宿題やった甲斐があったねー」

そう言って頭を撫でてくるリンに対し、琴はニカアッと歯を魅せて笑った。

横で、ジャーマンポテトを食べていたくるたんは、原型を留めたジャガイモを口から吐き出した。

「なっ、なっ！」驚くリン。

「へー」にこり、志太。

便利だが使いたくない能力である。いや、使わせたくない能力か。

てゆうーかそんなこともできたんだねすっごーい。

ジャガイモを川に投げると、アヒルがクチバシで突ついた。

お茶をコップに注いでくれるリン。

桜の花びらが、水面に着地した。音もたてず。

なんかいいね。

また星葉がなにかをしたのか、琴が怒りだした。

ツッコミみたいなチョップを繰り返す琴。

リンが笑い、くるたんが震えながら笑い、志太がひっそり微笑む。

星葉がツッコミ返す。

これはこれでいいな。

どさくさに紛れて、星葉にブルドックにされるくろたん。

「うわー！ 星葉なにやってんだお前！！」

「はっはっは いっけねえさ」

これもこれでいいな。

「いやっつ、いいわけないっすよ！？」

「ぶる〜、ぶる〜」ブルドックくろたん。いやあ、可愛い可愛い。

「お兄ちゃん……感覚タフネス！」

くろたんはその後、リンが作ってきたクッキーを食べてもとに戻った。かわいそうな体質だな。

琴視点。

午後1時。

あたしは今、お兄ちゃんの部屋のドアの前にいる。

キイツと音をたてないように、ゆっくりとドアを開ける。それでもやっぱり、音は少したつ。

薄暗い部屋の中でも、ベッドで寝るお兄ちゃんの顔は、はっきり見えている気がした。そんな気がした。

あたしはしゃがみこんで、目の前のお兄ちゃんの横顔を見た。

きれいで、やさしくて、かつこよくて、あんまり笑わない、かわいい顔。

上から見てみる。お兄ちゃんの頬を触ると落ち着く。ひたりと指が吸い込まれる。

この人は、リンちゃんのことを好きなんだ。

3日前、雨に濡れたように泣くお兄ちゃんを見て、そうだと気付いた。

あの日、呼び止めて告白したんだと思う。

お兄ちゃんにいつぱい甘えたときも、お兄ちゃんは泣いてた。

リンちゃんのことを好きなのに、あたしなんか甘えるように抱きしめたから、いけなかったんだ。

あたしは色々間違ってた。

リンちゃんと寝たとき、リンちゃんは変な顔をしていた。そりゃ  
そうだよ。

「きょうだいだもんね……」

お兄ちゃんの目に、あたしの涙が落ちた。

「でも好きなんだよ……？」

だから、もう傷つけない。

苦労もなるべくさせないよ。

朝は一人で起きる。

顔も言われる前に洗う。

お皿洗いもする。

お風呂も一人で入る。

「でも、あとちょっとだけ、甘えさせて。お兄ちゃん……」

お兄ちゃんの唇を見る。

あたしはキスをした。

落ち着く温かさの、その頬に。

一方通行のキス。

「明日から学校だから、もう寝るね。お休みなさい」

ドアを閉めた。ひたすらに。

桜は綺麗なのは、傳いから。(後書き)

ご愛読ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4976g/>

---

ダラダラ春休み。

2010年10月8日16時12分発行